

中級クラスのスピーチ活動における テーマ選択の問題

一宮由布子・井田尚美

yfk138@gmail.com(一宮)

idanaomi2002@yahoo.co.jp(井田)

0. はじめに(動機と目的)

リュブリャーナ大学における日本研究講座の「現代日本語Ⅲ」(3年生必須科目)の授業では、卒業論文執筆とその発表に向けた自主的な作業を進める準備段階として、正式な場で複数の人を前に日本語で発表し、質問に答える技術を養う事を目的として、スピーチ活動を行っている。特に3月のスピーチ発表会は、大学の教員に加えて客員教授や在留邦人などが聴衆となり、質疑応答や学習者の評価に参加する。これらのゲストからは例年、概ね良い評価をいただいているが、今年は例年に比べてスピーチの内容が浅かったという意見が聞かれた。本発表では、これがテーマ選択に起因すると仮定して分析し、来年度以降に向けた改善策を提案する。同時に、時間的制約がある中で効率的に行える中級レベルのスピーチ活動のカリキュラムについても考察を加える。

1. 問題の背景

1-1. 授業の概要

コミュニケーションには、1対1で、話し手・聞き手が頻繁に交代する会話方式のものと、1対複数で話者の交代がなく、役割を固定したまま話者がまとまった内容を一方的に話し続けるパブリック・スピーチ形式のものがある。日本研究講座では、2年生で在留邦人へのインタビュー活動を行うことで、1対1の会話方式のコミュニケーションの訓練をし、3年生で初めて1対複数のコミュニケーションであるスピーチの訓練を行う。

3年生の現代日本語の授業のカリキュラムでは、『文化中級日本語Ⅱ』をほぼ1年で終了するが、それに加え、年間を通じたスピーチ活動を実施している。この授業では年に3回スピーチを行っており、第1回目は、夏休み後の10月から11月に、夏休みの宿題として課題に与えたテキスト、または自分で選んだ日本語の小説、映画、漫画などの粗筋と感想をクラスで発表するというものである。第2回目は、教科書で日本の歴史を扱うのに合わせて、冬休み明けの2月に、各学習者が任意の時代の出来事や文化などについて調べて発表する。第3回目は、3月に、3年生のスピーチ活動の総仕上げとして、客員教授や在留邦人を招待してのスピーチ発表会を行っている。最初の2回のスピーチは、このスピーチ発表会の準備段階とも言うことができる。

この授業は口頭表現を専門に学習するものではなく、日本語の総合的な能力を高めるための授業であり、その一環としてスピーチ活動を行っているので、授業でスピーチに割くことができる時間は少なく、学習者が授時間外に個人的に行う準備の比重が大きい。それにも関わらず、例年のスピーチ発

表会ではおおむね良い評価を聴衆からいただいていた。

しかし、2009年度のスピーチは、昨年度と比べて、内容に関する聴衆の満足度がやや低かったように思われた。具体的には、テーマの掘り下げが足りない、結論がありきたり、など、例年あまり聞かれなかった意見が発表会后、公式あるいは非公式に出た。聴衆は毎年変わるが、初めての参加者からだけでなく、毎年スピーチを聞いている大学の教員（3年生担任以外）からも同様の意見が出たことから、内容の薄さは2009年度のスピーチの全体的な傾向だったと考えられる。

試験の結果や通常の授業における発話などから考え、2009年度の学習者が例年に比べて日本語の習熟度において特に劣っていたということはない。また、スピーチにかける時間や教師の指導の回数なども、例年と同じ程度のものであり、ここに原因があるとは考えがたい。問題となった年度以前と異なる要素であり、スピーチの内容に関わる可能性のあるものとしては、教師から学習者に与える統一テーマが何らかの影響を与えたのではないかと推測できる。

1-2. 統一テーマ

2002年度から行っているスピーチ発表会では、2005年度を除き、統一したテーマを教師が与え、学習者はその範囲内で各自のテーマを決定していた。各年度の統一テーマは以下の通りである。

2002 スロヴェニアの歴史上の人物について

2003 日本にある面白いもの、珍しいもの

2004 日本人に紹介したい人、または物

2005 （自由テーマ） 例）方言について／スロヴェニアの忍者クラブ

2006 EU内で現在問題になっているニュースと、それに対する自分の意見

例）スロヴェニアの現代の若者の問題／ヨーロッパの不寛容／核廃棄物の処理の問題

2007 スロヴェニア、またはヨーロッパの人物、物、行事などについて歴史的な観点から述べる

例）十日間戦争について／スロヴェニアの最も美しい教会／フランツェ・プレシエーレン～一番大切な国民の詩人

2008 ヨーロッパ独特の文化または事物をアジア人や日本人に紹介する

例）スロヴェニアのお茶／竜とドラゴン／復活祭

2009 異文化体験：自分が日本や外国に旅行したときの体験や、外国の映画や本などの作品に接して感じた事について

例）異国の食べ物／温泉の思い出／私のものに触らないで

2008年度までは、主に人や物に関する情報を聴衆に説明する事を主眼においたテーマを与えていたが、2009年度は、統一テーマを「異文化体験」とし、学習者自らの体験と、それについての意見を述べさせた。その理由は、①同じようなテーマが続いたのでマンネリからの脱出をはかったこと、②教科書の該当単元で「異文化体験」をテーマにしたスピーチを扱っており、教科書の基本に戻るねらいがあったこと、③留年生が多かったため、前年度と類似したテーマを避けたことがある。

次章では、2008年度までと2009年度のテーマの具体的な違いについて考えることとする。

2. スピーチにおけるテーマのタイプ

2-1. スピーチの分類

スピーチ（パブリック・スピーチ）は、英語教育では研究が進んでいる分野である。三角（1999）、中島（1998）、野村（2004）などによれば、英語教育では、スピーチは目的によって 3 種類または 4 種類に分けられる。それぞれ多少の違いはあるものの、おおよそ以下のような分類となる。

- 1) 情報を伝えたり教えたりするスピーチ（The Speech to Inform）
- 2) 楽しませるスピーチ（The Speech to Entertain）
- 3) 説得する／納得させるスピーチ（The Speech to Persuade）

上記に加え、「儀礼的スピーチ」「行動を促すスピーチ」などが挙げられる場合もある。

一方、日本語教育では、東海大学留学生センターが以下のように分類している。

- | | |
|--------------|--------------|
| 1) 方法説明のスピーチ | 2) 情報提供のスピーチ |
| 3) 意見表明のスピーチ | 4) 提言のスピーチ |

それらの内容から、方法説明、情報提供のスピーチは The Speech to Inform に、意見表明、提言のスピーチは The Speech to Persuade と考える事ができる。従って、本論では The Speech to Inform を「情報提供のスピーチ」、The Speech to Persuade を「意見表明のスピーチ」として話を進めたい。

この分類によって、当講座のこれまでのスピーチの統一テーマを見ると、2008 年度までは「スロヴェニアの歴史上の人物について」「日本の人に紹介したい人、または物」などの情報提供スピーチ、2009 年度は「自分の異文化体験と、それに関する感想・意見を述べる」という意見表明タイプのスピーチを行ったと言える。

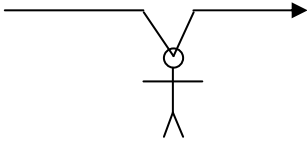
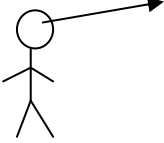
2-2. 情報提供スピーチと意見表明スピーチの違い

次に、情報提供スピーチと意見表明スピーチの特徴と違いを考察してみたい。

【情報・内容】

まず、スピーチの情報・内容という点では、情報提供スピーチでは、ソトにある情報を入手し伝達するが、意見表明スピーチでは個人内体験と意見、考察をウチから発信する。情報提供スピーチでは、「説明」だけすればよいのに対して、意見表明スピーチでは、「説明＋説得（聴衆への働きかけ）」をしなければならない。情報提供スピーチでは、既に“書かれているテキスト”が存在するので、質が一定のものを得やすい。話し手が行うのはそれらの情報の“翻訳”と、そのプレゼンテーションである。

一方、意見表明スピーチは、私的体験を語るものであり、その内容は当然質・量ともに一定ではない。資料の“翻訳”が主な作業となる情報提供スピーチとは異なり、話し手は内省によって考えや意見を自分で作り出さねばならない。

	情報提供スピーチ	意見表明スピーチ
情報内容	外部情報の伝達  ソトにある情報を入力し伝える 説明 外部情報＝既成のテキストが存在 一定レベルの質を保持しやすい 話し手は、それらの情報の“翻訳” とプレゼンテーションを行う	個人内体験と意見、考察 (私的)  ウチからの発信 説明＋説得(＝聴衆への働きかけ) 私的体験＝質・量のレベル・内容が一定ではない 内省による考えや意見の創出
手順	1. (テーマ決定のための) 情報の収集 ↓ 2. テーマの決定 ↓ 3. (テーマに関する) 情報の収集 ↓ 4. 構成 情報の配列・コラージュ 配列法：テーマが出来事や人物の場合、 時間系列の方法を使いやすい	1. 経験、アイデア、意見の内省 ↓ 2. テーマの決定 ↓ 3. (内容・構成のための) 経験、アイデア、意見の内省 ↓ 4. 構成 論理的、論証的、因果関係的な組み立て
重要な点	情報の質と量、そしてその明晰な説明 ※「質」＝情報の正しさ／聴衆の興味に合っているか／聴衆にとって未知かつ有用な情報か 等	聴衆の興味を引き、納得させ、共感を得る (聴衆への働きかけ)
その他、メリット	話し手＝情報を持っている人 聞き手＝情報を持っていない人で、その間での情報伝達なので、話し手に優位性があり、評価を得やすい	自分の体験、意見を自分の言葉で語るができる

[表 1：情報提供スピーチと意見表明スピーチの比較]

[手順]

スピーチの準備の手順としては、情報提供スピーチでは、まず、テーマを探すために情報収集を行う。テーマを決定した後、内容を構成するためにテーマに関する情報を再度収集する。その上で、それらの情報を配列、コラージュする。配列法として、テーマが出来事や人物の場合には、比較的簡単な方法として時系列に並べるものがある。現在入手できる 2008 年度以前のスピーチ原稿を見ると 26 例中 15 例、うち人物に関する発表では 7 例全てが完全に時系列に沿った構成となっている。

それに対して、意見表明スピーチでは、まず、経験やアイデア、意見を内省することから始まる。そしてテーマを決定し、その後スピーチを構成する材料を探すために、またテーマに関する経験、アイデア、意見を内省する。スピーチを構成するには、意見表明スピーチでは、論理的、論証的、因果

関係的な組み立てが必要な場合が多く、それは容易とはいえない。2009年度に学習者が作成したスピーチ原稿は、その多くが「体験」→「結論（意見）」という流れとなっている。しかし、論証的、因果関係の説明があまりなされていないため、例えば「温泉に裸で入るのは抵抗があったが、お湯が気持ちよかった」→「実際に体験するのは重要だ」、「手で食事するインドの習慣に、はじめは驚いたが徐々にその方がおいしいと思った」→「異文化を理解するには実際の体験が重要だ」というような、聞き手にとっては多少唐突な感のある結論になってしまっている。

【重要な点】

情報提供スピーチでは重要なことは「情報」である。情報の質（聴衆にとって未知かつ有用な情報か、情報の正誤など）と量、およびその明晰な説明により情報を正しく理解してもらわねばならない。これに対して、「意見表明」では、情報そのものよりはむしろ、聴衆の「共感」を得ることのほうが重要となる。そしてそのためには、聴衆が既に持っている知識や常識、概念に働きかけなければならない。

【その他、メリット】

情報提供スピーチでは多くの場合、話し手と聞き手の間に情報ギャップがある。話し手は情報を与える側、聞き手は情報を受け取る側なので、前者に優位性があり、評価を得やすい。意見表明スピーチのメリットとしては、自分の体験や意見を自分の言葉で語れるということがある。実際、2009年度の発表会で学習者が用いた補助資料のうち、語彙リストはA41枚か、それ以上にわたっていた例年に比べて語彙数が少なく、中には配布しなかった学習者もいた。

このように二つのタイプを比較してみると、情報提供スピーチより意見表明スピーチのほうが難易度が高いように感じられる。意見表明スピーチの難しさは、以下のように集約されるだろう。

まず、話し手が自分の考えや意見を、内省を通じてまとめなければならない点である。2009年度の統一テーマである「異文化体験」の場合、自らが体験した「事実」や「当時の感想」を記憶により配列した後で、それらを材料にして「感想」を「意見」に昇華させ、さらに言語化するという手続きを踏むことになる。これは、三角（1999）の言うように時間がかかる作業であり、言語的にも高度な技術が要求される。

次に、学習者は、情報提供スピーチのように未習語彙をさほど使わなくても良い代わりに、聴衆を納得させる妥当性を持った意見を提示してみせる必要がある。そのためには、スピーチの構成に論理的展開が求められる。当講座の3年生の場合、教科書の課題によく見られるテンプレートに沿った文章作成にはある程度慣れているが、自分で効果的な構成を選択するという作業には慣れておらず、前述のように一足飛びに結論部分に至ったり、ステレオタイプの意見に終始してしまいがちになる。

以上、情報提供スピーチと意見表明スピーチの違いを考察してきた。広い意味での情報を与えるという点では、情報提供スピーチも意見表明スピーチも情報を与えるものではあるが、それぞれ情報の質が異なる。情報提供スピーチは、実際の、役に立つ、または教養的な知識を与えるのに対し、意見表明スピーチは、話者の個人的な体験・意見という「情報」を与える。ゆえに聞き手がその情報を知っているかどうかという点では、意見表明スピーチで語られる個人的体験の方が、聞き手は知らな

いと言える。しかし情報提供スピーチにおいては、聴衆がその情報を知っているか知らないか、有用であるか否かが重要なのに、意見表明スピーチでは、その情報が聴衆にとって面白く、共感を得られるかどうか重要である。情報提供スピーチでは、聞き手の属性がわかれば、彼らの知らない、かつ有益な情報は何か推測しやすい。実際、今までは日本人にヨーロッパ文化を紹介する、という分かりやすい図式で、聴衆の特徴を特に意識しなくとも深刻な問題が生じる事はなかった。しかし、意見表明スピーチでは、聴衆が持っているであろう概念や常識など、情報提供スピーチ以上に内的な要素を知らなければ聴衆の高い評価を得にくい。

これらのことから、意見表明スピーチでは、聴衆がどのような人たちであるか知るための作業、すなわち聴衆分析が、情報提供スピーチ以上に重要なのではないかと考えられる。次に、この点について考察を進めることとする。

3. 聴衆分析の重要性

日本語教育においては、口頭表現を指導する際、聞き手に配慮すべき点として、「聞き手に興味深く、役立つ内容にする」という事は言われるが、その前段階としての聴衆分析の重要性はさほど強調されていない。これは、授業で行うスピーチ活動が文型や表現、発音、イントネーション、あるいは発表の構成など、語学・技術的側面を重視していること、また、多くの場合、活動が教室内で行われるため、聞き手が発表者と同じ属性を持つ学習者、あるいは発表者の語学レベルや背景を良く知る教師に限定される事などから来る傾向だと考えられる。

これに対して英語教育では、スピーチを行う際の 5 段階、すなわち「構想、配列、修辞、記憶、所作」のうち、最初の「構想」で、テーマの焦点化と絞込み、誰の／何のためのスピーチか、という目的決定、そして聴衆分析を行う（三熊：2002）とされる。中でも聴衆分析は、スピーチの準備を行う上でかなりの程度重要視されている。例えば中島（1998）は、「話の決定権は聴衆が持っているので、聴衆の性格や特徴を前もって知っておく事」の必要性を強調する。具体的な分析事項は、多少の差異はあるが、おおよそ以下の通りである。

Gentzler による聴衆分析の具体的事項（野村：2004）

1. Age
2. Culture
3. Educational level
4. Prior knowledge of the topic
5. Biases about the topic
6. Gender
7. Socioeconomic status
8. Political orientation
9. Expectations
10. Size of the group

これに加え、聴衆の興味、話者との関係も考慮に入れ、与えられた統一テーマの枠内で微妙に内容調整をし、戦略的に個人のテーマ選択を行う必要がある（三熊：2002）。

当講座で行われるスピーチ発表会の場合、聴衆は大使館員、大学教員、留学生などの在留邦人で、特徴として、外国文化にある程度通じ、自らも異文化体験を持ち、比較的教育レベルが高い男女ということになるだろう。このうち、「外国文化にある程度通じ」、「自らも異文化体験を持つ」という点が、2009年度の統一テーマにおいては、プラス・マイナス両面に作用したと考えられる。すなわち、学習者がスピーチの中で提示する異文化体験は、自らも同様の体験を持つ聴衆の共感を得やすい。その反面、外国文化や異文化体験について、学習者と同等、またはそれ以上に知識がある聴衆に、彼らが期待する新しい情報を与えるのは難しい。

先述したように、意見表明のスピーチには、相手の共感を誘うための高度な戦略的技法が求められる。自らの異文化体験の表層部分のみを語り、ステレオタイプの結論を出すに留まる者が多かった2009年度のスピーチは、Torok（2004:22）のいうスピーチでの「9 sins¹」のうち、「Boring your audience」「Unclear purpose/message」の二つにあてはまり、聴衆の興味と関心を共感にまで至らせることができなかった。これが、内容に関する若干の不満につながったのではないだろうか。

文型や表現、構成、発音やイントネーションなど、語学的側面に集中した指導を教師が行い、学習者もまた労力の大部分をそこに割く事は、「現代日本語」という語学の授業の中でスピーチを行う場合には当然のことであろう。しかし、外部から聴衆を招いてスピーチを行い、その評価が学習者の成績や学習動機につながる可能性がある以上、教師、学習者ともにある程度詳細な聴衆分析を行い、戦略的にテーマを選択することが成功につながると考えられる。

4. まとめおよび今後の改善案

前項まで、2009年度に行ったスピーチ活動が聴衆の十分な満足を得られなかった原因について分析を行った。その結果、問題となった年の統一テーマに選んだ意見表明型のスピーチは、情報提供型のそれと比べて難易度が高く、聴衆の評価を得るのが困難であり、特に内容に関する満足度を高めるためには聴衆分析が重要であることが分かった。言い換えると、教師の与えた統一テーマという全体レベルでのテーマ選択において、例年の情報提供スピーチから意見表明スピーチに変えたことでスピーチの難度を上げてしまったこと、そして聴衆分析がより重要な意見表明スピーチを行ったにも関わらずその重要性を十分に認識していなかったことで、聴衆分析を十全に行わず、個々の学習者が聴衆に合ったテーマ選びをできなかったこと、という、全体レベルでのテーマ選択と個人レベルでのテーマ選択の2つのレベルで問題があったと言える。これを整理すると、以下ようになる。

テーマ選択	1. 全体レベル	スピーチのタイプ	情報提供 vs 意見表明
	2. 個人レベル	聴衆の興味に適合した話題の選択が必要	=聴衆分析の重要性

以上の事を踏まえて、今後の改善策を考えてみたい。

¹ Torok(2004:22): 1Wasting time, 2Boring your audience, 3Lacking passion, 4Confusing your audience, 5Insulting your audience, 6Unclear purpose/message, 7Information overload, 8Stuck in your rut of delivery, 9Using slides that are boring, irrelevant or confusing.

今までは、様々なタイプを学習することで、スピーチ活動に慣れさせようとしてきた。しかし、この方法は次の点で学習者には大きな負担となり、結果的に中途半端な習得で終わってしまう。

まず、学習者の語学レベルの問題がある。中級レベルでは、理解語彙も習得文法もさほど多くはない。また、発表を構成する過程にも慣れていない。従って、テーマを変える度に前回とは違ったタイプの使用語彙や文型（未習のものも多い）に苦しむ事になる。時間的な問題もある。当講座では、通常の授業の中でスピーチ活動を取り入れているため、それだけに多くの時間を割くことができない。自然、課題の形での作業が多くなり、学習者の負担を大きくする原因となる。

これらの問題を改善するには、次の二つの方法が考えられる。

- A. あまり要求基準を高く設定せず、複数の異なったタイプのスピーチを行う
- B. スピーチのタイプを絞り、複数回行うことで完成度を上げていく

A.の方法は、スピーチ（口頭表現）そのものを訓練するには効果的な方法だといえるだろう。しかし当講座では、先述の時間的制約の問題、そして卒論発表が目標にあるということで、B.の方法をとるほうが現実的なのではないだろうか。特に、この10月から導入予定のボローニャカリキュラムでは、3年生が執筆することになる学士論文は、先行研究や資料のまとめが主となり、情報提供タイプの内容により近いものとなる。この点からも、情報提供のスピーチに重きを置いた学習を行うと、最終目標である卒論発表に役立つものになるだろう。

また、どの様な形で活動を行うにせよ、聴衆を明確に設定して戦略をたてる事が必要となる。当講座の場合、在留邦人が聴衆であることを学習者に意識させ、テーマ選択、原稿作成の段階から、聴衆の興味を引く有益な情報を与え、かつ共感を得るスピーチができるような方向へ導くことが、学習者・聴衆の双方にとって満足度の高いものを作り上げる第一歩となるだろう。

参考文献

- 荒木晶子他（2004）『口語表現ワークブック』実教出版
- 国際交流基金関西国際センター（2004）『初級からの日本語スピーチ 国・文化・社会についてまとめた話をするために』凡人社
- 重盛千香子（2005）「日本研究 3 年生のスピーチ自己評価」 日本語教育連絡会議論文集 vol.17 p.6-10.
- 東海大学留学習者教育センター 口頭発表教材研究会編（1995）『日本語 口頭発表と討論の技術 コミュニケーション・スピーチ・ディバートのために』東海大学出版会
- 中島晶子・古賀美千留（2007）「スピーチ活動における学習ストラテジーの変化」『フランス日本語教育』No.3、フランス日本語教師会（AEJF）、p.176-186.
- 中島弘（1998）「英語スピーチ・コミュニケーション概説」『園田学園女子大学論文集』33-I、p.35-58.
- 野村和宏（2004）「Be Prepared to Speak — A Step by Step Video Guide to Public Speaking にみるパブリックスピーキング論」『神戸外語第論叢』第 55 巻第 3 号、p.27-46.
- 三熊祥文（2002）「パブリック・スピーキングの実践と知的昇華」『オーラル・コミュニケーションの理論と実践』JACET オーラル・コミュニケーション研究会、三修社、p.41-73.
- 三角友子（1999）「アメリカのスピーチ・コミュニケーションのテキストに学ぶテーマ絞込みの指導法」

『一橋大学留学習者センター紀要』第2号、p.25-34.

脇田里子（2008）「口頭表現における議論する力を伸ばす試み」『同志社大学日本語・日本文化研究』
同志社大 学日本語・日本文化教育センター、p.14-30.

Torok, George. (2004) "Presentation Sins And How You Can Avoid Them", *The Toastmaster*, July
2004, Toastmasters International.